



〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiawase@edventure.jp URL <http://edventure.jp/>

3月のEd.ベンだよりは、毎年2月に行われるEd.ベンチャーの総会と教育講演会の報告がメインですが、今年は総会と教育講演会の報告の前に、現在無関心ではられない、ウクライナでの戦争について少しお知らせをさせていただきます。

私たちが私たちでいるための、考え・意見をお寄せください。

ご存じのように、大国ロシアは、隣国であるウクライナに侵略の砲火を浴びせました。世界中から非難の声が上がっても、状況は良くなるどころか、ますます悲惨さは増すばかり。都市の建物は破壊され、民間人も無差別な攻撃の標的とされています。年寄りや子どもを含む多くの人々が亡くなりました。避難することもできず、飢えと渇きと恐怖に震えているたくさんの人々。信じられない光景が私たちの目に飛び込んできます。戦後作り上げてきたと言われる世界秩序は、一夜にして崩壊したように思えます。この状況を受け、NATO各国では、自国の軍備増強がすでに大きな声で唱えられ始めました。

一方、目を国内に転ずれば、元総理が早速「核兵器の共同保有」を議論すべきと打ち上げ、今こそチャンスとばかりに、改憲や敵基地攻撃能力に関する議論が具体的なカタチで進んでいます。

また、世界的なコロナウイルスの影響に加え、ロシアへの経済制裁により懸念される、エネルギー確保の問題や原材料（ニッケルや小麦など）の輸入減少によって、私たちの生活にも物価上昇などの影響も出始めました。遠くで起きている出来事でも決して他人事ではないし、世界中で不穏な流れが生まれているようにも感じます。明るい将来像を抱ける時代ではないようです。「明日は我が身」という言葉がつきまっています。

様々な角度から様々なことを考えなければいけない、歴史的な転換点に私たちは立たされているのかもしれない。そんな私たちは、今考え、今話し、今伝えなければ、この先、私たちが私たちでいられなくなってしまわないのでしょうか。そんな不安がわき上がってきます。

そこで、皆さんから意見や提案をいただき、このEd.ベンだよりで可能な限り、ご紹介していきたいと思えます。このEd.ベンだよりが少しでも、皆さんの意見交流や意見表明の場になることを願っています。フェイスブックより読者は少しだけ少ないですが、真剣に考える人々の意見を表明できる、小さな小さな論壇として考えていただければ幸いです。

内容は、今回のウクライナでの戦闘をきっかけに考えたことであれば何でもかまいません。

・平和 ・民主主義 ・武力 ・経済 ・命 ・歴史 ・政治 ・教育

ジャンルは問いません。また、こうした世界状況を受けて、開催して欲しいイベントや講演会や学習会などの希望もお寄せください。可能であれば、開催に向けて努力したいと思います。

宛先は、Ed.ベンだより「頭を寄せ合うプロジェクト」係、toiawase@edventure.jp までお願いします。

総会報告 (2月19日オンライン開催)

【代表挨拶】おはようございます。コロナウイルスの変異株が次々と出現し、いつ収束するのか見当もつかない状況になっています。そうした中でもリモートではありますが、こうして会員の皆様と総会を開催できるのはうれしい限りです。

昨年はコロナもさることながら、事務局長としてEd.ベンチャーを支えてくださったG先生が亡くられるという大変残念なことがありました。先生は常に会全体の動きを把握し、的確に処理をされ、それぞれの活動が円滑に進められるよう、まさにEd.ベンチャーの要として活動されました。本当に大きな損失と言えます。ここで改めて先生のご冥福をお祈りいたします。

私どもの友人が一昨年、1897年から1972年までの社会運動史を年表形式でまとめて出版されました。その冒頭で、「日本では様々な場所や組織で民主主義について真剣な議論がなされていない、なされた記録がない。近くて遠い民主主義」と表現していました。平和と民主主義とはよく聞く言葉ですが、その中身について私どもは考えたことがないように思います。

コロナ禍により様々な矛盾が噴出している現状やEd.ベンチャーが今年度から取り組む女性の問題を考える上でも、一度原点に戻って思い返すことも大切なのではないかと感じております。以上です。

4・5月の事業概要 (詳しくはHPをご確認ください)

- *理論学習会 4月29日(金)13:00~「学修」「評価」から今の学校教育が目指しているものを整理する
- *授業研究会 5月16日(月)20:00~ジェンダーについての現状認識のための学習会
- *スタディツアー 5月21日(土)14:30~ 講演会:上原樹氏(ソーシャルワーカー)
- *外国人の子どもも理解 4月21日(木)19:00~「国際教室を運営してみよう」国際教室担当の実践報告
- *インクルーシブ 5月11日(水)19:00~ 講演会:NPO法人自由創造ラボたんぼ 米澤美法氏

教育講演会

「児童虐待から コロナ禍で女性の置かれた現状を探る」 周燕飛氏（日本女子大学人間社会学部 教授）

教育講演会では、今年の Ed.ベンチャーのテーマである「女性の生きづらさ」に迫るために、児童虐待を通して見えてくる、コロナ禍での女性の厳しい現実についてお話しいただきました。まず始めに虐待の増加の状況とその現状をどう理解するかからお話しははじまりました。

2000 年以降児童虐待相談件数と検挙件数が急増していること。特に、2020 年現在児童相談所が対応した児童相談所の相談件数は年間 20 万件程度に上っており、20 年前の約 11 倍の数である。そして、主な虐待者の約半数が母親であり、虐待の種別を見てみると、「身体的虐待」（38.2%）と「育児放棄（ネグレクト）」（32.5%）が全体の約 7 割を占めている。

母親による児童虐待の発生要因には 2 種類の仮説がある。

○病理説…母親の心理的病理の側面を強調する見方。虐待を行う女性の「母性本能の欠如」「親としての未熟さ」など、児童虐待を個人的な問題として捉える。

○経済・社会環境説…虐待を失業、低収入、精神的孤立などの経済・社会環境に起因する問題と見なす。

この 2 種類の仮説のうち、日本ではこれまで「病理説」が主流であったが、「経済・社会環境説」を支持する論者が 2000 年代以降に増える傾向にある。

「経済・社会環境説」の見方で、虐待経験ありの母親の属性を調べてみると、次のような傾向がある。

① いずれの環境指標（貧困率、食料を買うお金がなかった割合等）においても、悪い状況に置かれている。

② 「重病・難病・障害児」と「低出生体重児」を育てている割合が高く、ひとり親の比率も高い。

③ 「健康状態が良くない」、「うつ傾向あり」および「未成年者に親から身体的虐待を経験した」者の割合が高い。

こうした現状を確認した上で、次にコロナ禍で、女性を取り巻く経済・社会環境がどのように変わったかを見ていく。

全体的な背景としては、雇用喪失が、男性よりも女性に集中している「シーセッション」と呼ばれる現象がある。そこには 3 つの要因が考えられている。

① コロナショックでの不況産業に女性が集中している。→対面サービス型内需産業の不況

② 仕事か家庭かの二者択一で、自ら就業を控える女性が増加

③ 女性は、雇用調整の対象になりやすい非正規就業者が多い。

→雇用の非正規比率 女性 53.4% 男性 21.7%

このようなシーセッションを背景として浮かび上がった女性の厳しい状況をまとめてみると以下の通りとなる。

- ・女性、とりわけ子育て女性の労働時間と賃金が大きく落ち込んでいた。
- ・雇用「変化あり」の割合は、女性が男性の 1.4 倍。
- ・解雇や自ら離職した女性は、非労働力化と非正規化が目立つ。
- ・休校・休園は子育て女性の労働時間減の大きな要因。
- ・雇用「変化あり」既婚女性の約 3 割は「食費を切りつめている」
- ・雇用の変化が女性の精神的不安と強く関連。

これらの事実から意識しておかなければいけない課題としては、以下のとおりである。

●**コロナ禍の被害は女性に集中するような状況が長引くことによって、女性のキャリアに深刻な影響が及ぶことが懸念される。**

●**母親のメンタルヘルスの悪化によって、児童虐待の増加が懸念される。**

●**母親を取り巻く経済環境、育児環境の悪化に伴い、育児放棄や身体的虐待の事案が増える可能性がある。**

コロナ禍でより厳しい現状に置かれている女性の実態が伝わってくる講演でした。



教育講演会の後にパネルディスカッション第 1 部では、実際に生きづらさを感じている当事者のみなさんにご登壇いただき、感じている生きづらさをお話いただきました。私たちの生活のごく身近に生きづらさがあることを実感すると同時に、このように感じていることを共有していくことの重要性を感じる場にもなりました。続く第 2 部では、こうした実態を支えているであろう学校教育のあり方を、実際に教壇に立つ先生方が議論してくださいました。こうした角度からの物事のとらえ方はまだ緒についたばかりであることを感じるようになりましたが、Ed. ベンチャーとしては 1 年かけてしっかり取り組んでいきたいと思えます。

前号を読んだ方から「女性の問題を取り上げてくれてうれしかった」という感想が寄せられました。表にするべき声は多く眠っていて、表になることを待っているとも感じます。

【理事のつぶやき】戦争反対。この一言に尽きる。3 月 20 日の報道ではウクライナの避難民数は人口の 1/4 に相当する 1000 万人を超え、うち 300 万人以上が国外への避難を強いられているという。そのこと自体も衝撃的だが、連日報道される攻撃による被害の状況を見るにつけ、本当に暗澹とした気持ちにさせられる。特にわが子を亡くした母親の姿の映像には言葉も無い。何の罪もないはずの人々をそこまで追い込んでしまう「国家」とは何なのだろうか。人々に死を迫り、人生を簡単にねじ曲げてしまう力に、私たち個人は抗うことはできないのだろうか。何もできることはないかもしれないが、せめて「もう戦争はやめよう」と声を大にして言いたい。(TH)